

岩垂 弘著
『ジャーナリストの現場—もの書きをめざす人へ』

同時代社、2011年10月、494頁、2800円

石塚 秀雄

0. 本書の意義

たいへん、読んで面白くためになる本である。著者のようなジャーナリストとしての経験を、普通の人にはできない。一読しての印象は、まずうらやましいということである。国内外のいろいろな場所に行き、いろいろな重要な出来事の現場に立ち会い、いろいろな人を取材することはまさにジャーナリストという仕事でなければできないであろう。本書はそうした仕事をしてきた著者の一種のメモワールである。具体的で詳細な描写と考察は、なによりも著者の記憶力と記録力に基づくであろう。それは、37年間の取材生活において、名刺をすべて取ってあるということにも現れている。本書はエピソード形式でまとめているので、読者としては、興味のある箇所から、それぞれのテーマを興味深く読むことができ、現代史のいろいろな諸問題を読者なりに回想することができる。

著者は朝日新聞を退職後は「ジャーナリスト平和基金」を設立して、優れた活動をしているジャーナリストの発掘と顕彰を行っている。そのジャーナリストとしての一貫した姿勢は、現在の日本のジャーナリズムのあり方に大いに示唆を与えるものとなっている。

1. ジャーナリストとはなにか

本書は1958年から1995年の新聞記者生活、それ以後の2011年までの著者の

ジャーナリストとしての活動の一端を、162のテーマ項目に分けて構成されている。それらが執筆された期間は2004年8月以降から2011年7月までである。それらの大半はインターネットのメディアでの連載として発表されたものである。

構成は第1部「駆け出し記者として」で第34回まで、第2部「社会部記者の現場から」が第94回まで、第3部「編集委員」として第150回まで。そして第4部「フリーの視点」がその1から12までとなっている。著者は「事件記者」から社会部記者、そして編集委員といわば、新聞社の中で順調に職務を辿っていったといえる。

歴史家の色川大吉氏による「推薦文」は、「これは一記者の自分史であるばかりでなく同時代史にもなっている」と述べている。したがって、評者の紹介も自分史を織り交ぜたものにしたい。さて、本書の副題に「もの書きをめざす人へ」とあるように、本書の狙いの一つは、「ジャーナリスト」を目指す若い人への参考になることであろう。では、どのような点を参考にすべきなのか。現在、社会変動自体にともなって、ジャーナリズムの変動は激しく、したがって、ジャーナリストというあり方も変動しつつあると思われる。著者は、いわば大新聞社のジャーナリストとしての仕事をしてきたのであるが、いま起きていると思われる日本のジャーナリズムの変動とは、大手エスタブリッシュの新聞社のパワーの衰退傾向とフリージャーナリズムの台頭ということであろう。そもそも日本の新聞は世界的に発行部数が多く、読売新聞1000万部、朝日新聞800万部と言われるように4大新聞が世論形成に大きな影響力をもってきた。また新聞社はテレビ・ラジオなどとネットワークを組んで、いわゆるマスメディア業界を形成してきた。そこでマスメディアは産官政に次いで、世の中を支配する第4の権力と呼ばれることもある。著者も言うように、ジャーナリズムは権力への監視と批判をその存在理由とすべきであろう。なぜならば社会は常に権力支配の対象物であるからである。というような前提は、いまや崩れつつある。一方で、若者の新聞離れは拡大しており、インターネットの比重が増大しつつある。

さて、職業としてのジャーナリストの形成の道を自分史的な側面から見ると、日本の戦後の典型的な就業形態を見て取れる。その形式が現在の労働市場で

のくらい実現可能なのはやはり一つの問題であろう。著者の場合も、大学を卒業して、新聞社に就職して、お決まりの地方の警察取材からは始まった。これは記者訓練としては、当然視されるべきものであろう。事件としてメリハリのあるのは、なによりも犯罪である。そうした場が取材能力や文章能力の訓練となり、社会人になりたての若者が一挙にそうした場所に投げ込まれ、急速に高度な訓練を受けることになるのである。

現在の新聞社がどのように新人社員をリクルートしているのかの実体については評者は知らないのであるが、現今の大学生の就活は40社応募など当たり前になっているので、ジャーナリスト志望という明確な個人的願望をもって新聞社に入社してくる人物がどのくらいの比率でいるのであろうか。受験エリートがそのまま、会社就活エリートとして、エリート会社ならば部門を問わないという若者が多くなっているのではないであろうか。すなわち、ジャーナリストの資質そのものが問われるという変動が起きているのではないか。第1部で興味深く読むことのできるころの著者の経験したような記者修業の形態は、現在でも実施されているのであろうか。

2. 同時代史の側面

本書はいろいろなエピソードに満ちているのであるが、人物の剔抉ということで見ると、興味人物像が多く登場する。その中には鈴木善幸、三国連太郎、共産党幹部、脱走米兵、横井庄一、水上勉親子、由比忠之進などがいる。若い人にはどんな人だか分からない人もいるかもしれないが、それは本書を読んだの楽しみにしてもらいたい。ジャーナリズムがなぜ個人そのものに注目するのか。というのは、出来事というのは個人を通じて現象することが多いからであろう。社会というものが人々の集合体であるとすれば、人物像というのは思想や文化の一つ典型の人格化である。本書ではそれぞれの人物像もきめ細かく描かれている。読者は、現代史の形成が、それぞれの時点でどのような人格に体现されるのかを味合うことができる。社会学におけるオーラルヒストリーの手法は、ジャーナリズムの手法としては当たり前のことであろうが、一定の時間を経過して振り返るならば、客観的なものに見える歴史的現実というものが、

人的な不確定要素の影響を多く受けていることがわかる。

評者の個人的な関心からいえば、共産党の伊藤律を取り調べた特高の1人伊藤猛虎が戦後岩手で村長になっていたというのが、支配権力が戦後も形を変えて生き延びているという日本の戦後民主化の不徹底な感想とか、特高も平時では普通の人だとか、一方で、伊藤律を巡る諸問題について改めて人間の生き方について考えさせられたのである。評者は数年前に米国の古い公文書で、伊藤律スパイ説の言い出しっべとされる河合某の英文記録コピーを見る機会があった。河合某に占領軍情報機関から戦後月々金を支給し、提供情報を検討した書類であった。彼こそがスパイであった。河合某はいまでも戦前の革命運動の闘士のように見なされているようだが、それは歴史の不条理に他ならない。また、評者もエスペラント協会に加盟していた時期でもあったので、由比忠之進のベトナム戦争抗議の焼身自殺を印象深く覚えており、本書によって改めて思い出した。また評者自身にとっても60年代当時、ベトナム戦争は気鬱の種であったことを苦く思い出す。それは現在、日本の3.11東日本大震災後に日本人の多くの「自分は無力だ。自分になにかできることはないか」とほぼ同じ気持ちであった。しかしそれは私が未成年であったからそのような考え方をしたのであって、現在は、そのようには考えていない。由比さんがどのような考えであったのかは分からないが、おそらく自分にできることをしたのであろう。ともかく著者が見たいろいろな人物像は読者を新たな感想に誘ってくれるであろう。

3. 事件とジャーナリズム

著者は社会部記者となり、それも民主団体や政党の担当になったのであるが、政治的出来事や社会的事件に関わるエピソードが書かれている。ジャーナリズムは出来事を事件として報道するから、新聞読者は世の中の出来事を事件として受け止める。本書で描かれたいろいろな事件は、同時代の読者が共有するものである。たとえば、1963年の吉展ちゃん事件は子供の誘拐殺人事件であったが、評者も記憶に残っているのは犯人の車がルノーだかヒルマンだというような報道であった。その際の報道合戦(こうした現象が今あるのかどうかは知らないが)では、朝日新聞は容疑者シロ説をとり、毎日新聞のクロ説に負けた

そうであるが、このエピソードでは事件に対する新聞社のスタンスの違いがでていて面白い。シロ説は取材キャップの判断による方針だったとのことであるが、結果論としてクロ説が勝ったものの、ジャーナリズムの筋としてはどちらが良かったのかは難しいところである。たとえばこのクロ説が勝ったことの後遺症でもあるまいが、松本サリン事件では、朝日新聞は他社と同様に、容疑者の河野氏犯人説に軸足を置いた報道をしたのではないかと。吉展ちゃん事件のように人権論を基軸に置いたならば、逆にシロ説で朝日新聞の勲章または特ダネになったかもしれない。松本サリン事件のときの評者の個人的な思い出としては、評者の親戚が松本サリン事件の軽度な被害者でもあり、容疑者の河野家との近所つきあいもあったので、評者は岩垂氏に、河野さんは生協の組合員でもあり、犯人ではありませんから、担当の記者に伝えて下さいというようなことを言った記憶がある。松本サリン事件では、朝日新聞の関係者の家族が死亡したということもあり、新聞社として個人的な感情が介入して判断が狂ったという事もあるのかもしれない。

ジャーナリズムが報道をしなければ社会的な関心を引き起こすことはない。出来事は事件として報道されることによって、社会的に事件となる。最近の脱原発デモなどの新聞各紙の取り上げ方によって、世論の受け止め方も異なっている例が見られるように、事件は報道によって社会的なものになる。ジャーナリズムの手法としては、新聞の「公正性」を保持するためには、よくある両論併記に見られるように、少数異見にも配慮するということであろう。昨今のように新聞社が憲法案を出したり、政府方針に賛成表明するなど、ジャーナリズムの公正性は揺らいでいるが、今後のジャーナリズムのあり方としては、イデオロギー的な旗幟を鮮明にし、旧来の「公正中立・客観報道」という図式から離れる方向であろう。そして、「権力批判」はジャーナリズムの一部を構成するものにすぎなくなるであろう。結果的に客観性という基準がゆらぎ、新聞は特定オピニオン紙としての比重を増して、ジャーナリズムの機能全体が縮小にむかうであろう。現代社会において、ニュースの客観性の保障は薄れつつある。

またインターネットの普及によって、出来事は、個人が画面にアクセスすることによってしか伝わらなくなってきた。これまでいわゆる新聞テレビは、たとえば街頭テレビや号外発行などのように不特定大衆に伝達する方法を含め

て、いわゆる世論を形成することに貢献してきた。しかし、これからは、出来事や事件の報道によって社会的な世論を形成することは難しくなってきた、人々は事件を自分に関係あるという共感を持たなくなるであろう。したがって事件として取り上げられるものはだんだんすくなくなってくるのではないだろうか。

4. 戦後の社会運動とはなにか

著者は社会部記者として平和運動や協同組合運動を取材してきた。いわばジャーナリストとしての第三者的な視点が重要なのは、いろいろな出来事の当事者の意見とは自己正当化の意見だからである。一方、第三者にとっては基本的にはその当事者の主張内容自体はいつでもよいことである。ジャーナリストの役割をわれわれはロシア革命やメキシコ革命をルポしたジョン・リードや中国革命をルポしたスメドレーやベトナム戦争をルポした本多勝一などをその好例として想起することができる。ベトナム戦争報道の教訓からアメリカは以後、ジャーナリストの従軍報道を規制し、戦争や紛争の実態を「客観的」に報道する自由は著しく制限されている。いまや危険な場所にはフリージャーナリストばかりが行くということはジャーナリズムのあり方にとっては良いことではない。

さて、おそらく日本のジャーナリストで社会運動を深く取材してきた人は著者岩垂氏が一番であろう。著者が見る日本の平和運動や協同組合運動は決して良質なものだったとは言えない。しかし、著者はその基本的な方向に大いに共感をもって、一般読者に紹介をしてきた。著者の視点は、ちょっとしたところだが重要な問題点に向かい、読者に考える材料を与えてくれる。たとえば、沖縄ではひめゆり部隊の最後の場所は山ではなくサトウキビ畑であったとか、慰霊塔が県別に建立されていたという挿話。また、脱走米兵と3日間暮らした話などは、著者の記者魂の躍如たるものがある。ベ平連運動は、小田実氏や鶴見俊輔氏などが関与し、当時は既成の平和運動勢力とは一線を画すというか、敵視されていたと思う。現在でもいわゆる労働運動と市民運動は社会運動としてネットワークを組んではないように、その背景には日本的な根深いものがあ

る。評者も当時、米国にいる知り合いの青年が徴兵逃れで日本に来たいという話に多少関わり、べ平連に相談することも考えたこともあったことを思い出した。当時べ平連の事務所は御茶ノ水の神田川に面したうらびれた雑居ビルにあった。結局、その青年はカナダに逃げたが、いずれにせよ当時の日本の平和運動の分裂の不幸は現在も変わらずに続いていると思われ、著者もその点を遺憾に思っているようである。

5. 政治的出来事

本書で触れている政治的出来事には、1970年代前後に起きた日米安保、沖縄復帰、共産党問題、北朝鮮など、さらには広い意味では明治時代の民衆憲法の取材がある。これらのテーマは現在まで、多かれ少なかれ形を変えて継続している問題でもある。著者は1972年の沖縄返還の時の沖縄の町の様子をあまり喜びのないものだったと描いている。評者は当時、沖縄復帰または返還は、連邦形式がよいと考えていた。日本の単一民族主義的国家観はよくないし、自治州形式が良いと思っていたからである。これは民衆憲法案にも通底すると思われ、日本で国体制度に関わる根本的な議論だと考えているが、現在の日本の国家制度の議論はきわめて低調であるといえる。

本書では、そうした日本の政治的低迷が1970年代前後に政治的なアクターの動きの中にすでに散見されることを示している。

6. 協同組合運動への視点

著者がジャーナリストとして強い関心をもったひとつは協同組合運動であった。おかげで日本の協同組合運動は、適切な第三者的視点あるいは評価を受けることができた。日本における協同組合運動は農協であり生協であったが、著者は新しい運動として労働者協同組合にも注目した。このことは単に協同組合運動という視野だけではなくて、日本社会の全体像への考察をふまえてのものである。著者の新聞記者としての「第1卒業論文」は被ばく問題で、これは外国人被爆者などにも言及したものであり、「第2論文」はスペインモンドラゴ

ン協同組合についてである。いずれも日本のあり方を相対化して見る広い視点に裏打ちされたものである。朝日新聞に連載されたことは協同組合関係者にとっても大変喜ばしいことであった。評者はモンドラゴン取材に一部同行したのでなおさらであった。

7. 3.11後のジャーナリズム

本書の第4部は、フリージャーナリストの視点から、現在のジャーナリズムのあり方への危惧を述べている。ジャーナリズムはだれのためにあるのか、と改めて問い、それは民のためにあると答えている。とりわけ社会的出来事や政治的出来事について、ジャーナリズムはどのように報道しているのか、またしていないのか。フクシマ原発発災以後の大新聞の報道のあり方をよしとしている新聞読者は減少しつつある。大手ジャーナリズムが社会的正義を代弁していた古き良き時代は去りつつある。本書は、そうした新聞にとって良い時代の香りがいっぱい詰まっているものである。しかし、3.11以後、ますます顕在化するジャーナリズムの危機をどうするのかという、憂いの表明で本書は締めくくられている。後進のジャーナリストあるいはジャーナリスト志望の人間は、どのような仕事形態をとるのであろうか。大手マスコミは既成権威化しつつある。個人としてはどのように仕事をするのか、組織としてはカネか社会的使命かの選択を迫られている。

しかし、もの書きをめざす人々が本書からジャーナリストのあるべき姿勢とはなにかをしっかりと読み取るとはまちがいない。そして生きづらい真のジャーナリストを目指す人が少なからず、著者の後につづくであろう。